

随筆喫茶

自然災害、疫病。「昨日と繋がる
ない今日」を生きなくてはならない
私たち。人として何ができるのか
と問った時、私にできることはア
ートであった。私の復興支援アートは
心と環境の亀裂を手あてしようと
する折りや、贈与に近いものである。

これまで、新潟県中越地震（20
04年）や東日本大震災（11年）、
熊本地震（16年）等において復興支
援に取り組んできた。17年の九州北
部豪雨災害は英彦山修験道文化園で
ある福岡県東部にも被害を及ぼし
、自然信仰を旨とする修験者の子孫で
ある私は、より強い痛みを感じた。

災害直後、土砂で真っ白になっていた
大きな樟の流木に出合った。彫刻
家である私は被災した子ども達のた
めに、この流木で水の守神としての
「龍」の木彫を制作した。新設の朝
倉市立杷木小学校に設置したところ
ろ、子どもが「この龍がいるから、
もう災害が起こらないような気がす
る」と言ってくれた。この言葉を、
私はどのような功績よりもうれし
く、誇らしく感じた。

また、この災害で英彦山山嶺の樹
齢約300年の山桜が倒れた。地域
の方々の願いを受け、この山桜で英

知足美加子

手あてとしてのアート

2021.3.14
西日本新聞(日曜版)



とまたり・みかこ 九州大芸術工学部教授。
博士(芸術学)。彫刻家(国画会会員)。日本
山岳修験学会評議員。英彦山修験の山伏「知足
院」を先祖に持つ。中越地震、東日本大震災、
熊本震災、九州北部豪雨災害において彫刻制作
などアートを通じた復興支援活動を行う。

彦山守護童子を彫っている。この他、
被災木で制作した木彫《枯華微笑》
は被災地の朝倉市にある杉岡製材所
に設置され、《寒水大師と十一面観
音》は同市寒水地区に寄贈予定であ
る。アートは、倒れた木のいのち
を、愛され尊ばれるものとして再生
する可能性がある。途切れたものを、
紡ぎ直す力がある。

彫刻だけでなく、「いのちあるもの
」の循環をとりもつという「復興
ガールデン」の制作も行った。朝倉
市黒川の廃校利用の美術館「共星の
里」には、流木だけでなく大量の巨
石が流れ込んだ。被災現場を前に、
いつの日かここが美しい「庭」とし
て再生してほしいと願った。これは、
雪舟の築庭と伝わる英彦山の禅庭か
ら得たアイデアである。地域内外の
方々や九州大の学生と植栽計画を練
り、庭園デザインを行った。その際、
目に見えない土の中の菌根菌(植物
の根と菌との共生体を作る)のネッ
トワークを意識した。流木や廃材は
消炭に変え土壌改良に活かし、鎮魂
の気持ちをつとめた。

最も印象深かったのは、各参加者
に「自分の木」として一本の苗木を
選んでもらい植樹したことである。
一人の学生が、「木を植えることは
未来を思うこと」と語ってくれた。
自分のいのちのバトンを木に受け取
つてもらったような感動があった。
自然の循環は、変化を繰り返しながら、
その創造性と永遠性を失うこと
はない。災害という亀裂によって過
去との連続性を失ってしまった時、
救いとなるのは、「自然の再生力と
永遠性」なのだろう。変わらずに咲
く花や螢火は、未来にもこの時間が
続くと思わせてくれる。

生死を問うような事態を前に、ア
ートに何ができるのかわからない。
でも私は、心にあるいのちを手あて
することはできるのではないかと感
じている。それは、人間が未来を創
造できるという自信を取り戻すよう
な呼びかけや励ましではない。
それでも、菌根菌の繋がりが木々を
交流させ森の再生能力を高めるよう
に、打ちのめされたものに再生の力
を与えるのだと信じている。